

令和6年漁期イカナゴシンコ(新子)漁況予報

令和6年2月19日
兵庫県立農林水産技術総合センター
水産技術センター

1. 産卵親魚の調査結果

播磨灘北東部の鹿ノ瀬で、12月1日から1月4日にかけて延べ6回、文鎮漕ぎによる採集調査を実施した。

(1) 親魚密度

文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数は、昨年を下回る11.3尾で、平年を大きく下回り、依然としてかなり低い値であった。年齢組成は1才魚が69.0%、2才魚以上が31.0%であった(表1)。

表1 親魚密度(文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数)

	1才魚	2才魚以上	全体
今年	7.8尾 (69.0%)	3.5尾 (31.0%)	11.3尾
昨年	20.3尾 (76.3%)	6.3尾 (23.7%)	26.6尾
平年	126.4尾 (72.6%)	47.6尾 (27.4%)	174.0尾

(平年:昭和61~令和3年の平均値)

(2) 親魚の全長組成

親魚全体の平均全長は105.7mmと昨年の103.4mmを上回った(図1)。

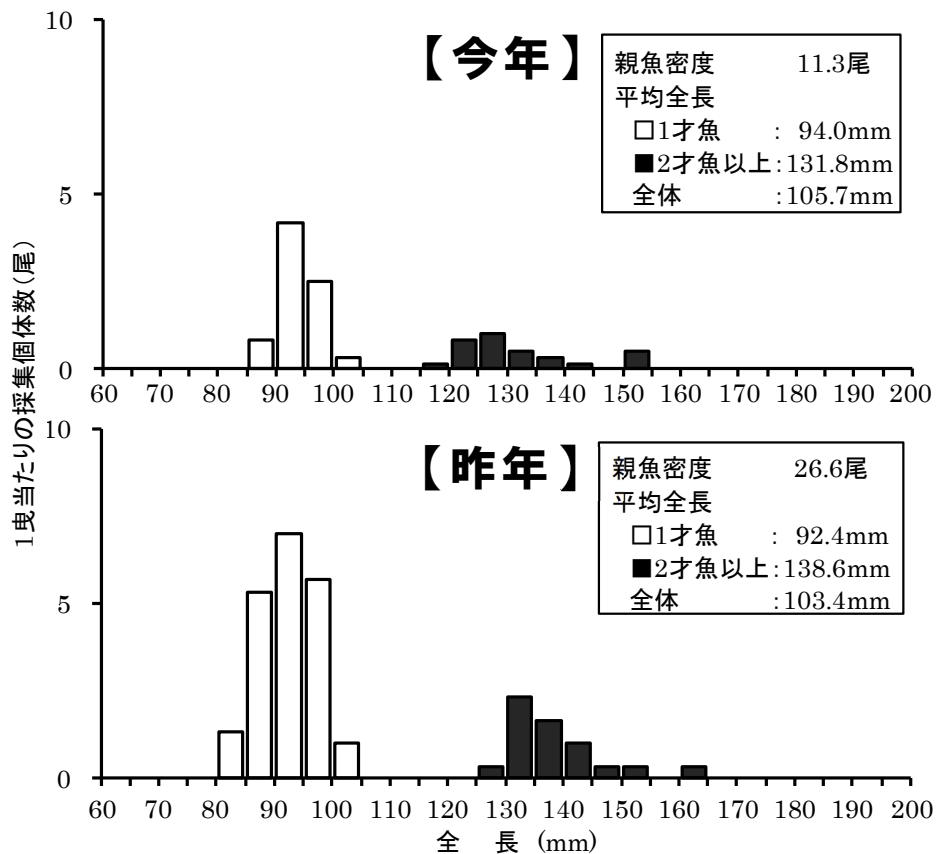


図1 親魚の全長組成

(3) 産卵量指数

今年の産卵量指数は0.17で、昨年を下回り、平年を大きく下回り、2017年漁期以降続く不漁年の中でも低い値であった（表2）。

*産卵量指数：総産卵量の目安となる数値。1尾当たりの産卵量は親魚の大きさによって異なるため、毎年親魚密度と全長組成から算出している。

表2 産卵量指数(昭和62(1987)年漁期の産卵量を1.00とした場合の相対値)

	1才魚	2才魚以上	全体
今年	0.06 (35.3%)	0.11 (64.7%)	0.17
昨年	0.15 (39.5%)	0.23 (60.5%)	0.38
平年	1.23 (39.6%)	1.88 (60.4%)	3.11

(平年:昭和61~令和3年の平均値)

(4) 産卵盛期

今年の雌親魚の生殖腺（卵巣）熟度指数は、ピークが不明瞭であったが、12月19日から28日にかけて大きく低下した（図2）。19日の調査では産卵が始まっておらず、28日には大半が産卵を終えていたが、1月4日の調査でも、産卵を終えていない個体が採集された。以上のことから、鹿ノ瀬における今年の産卵盛期は、昨年とほぼ同時期の12月19日から1月4日の間であったと推察されるが、例年に比べ産卵期間は長く、遅くまで続いたと考えられた。

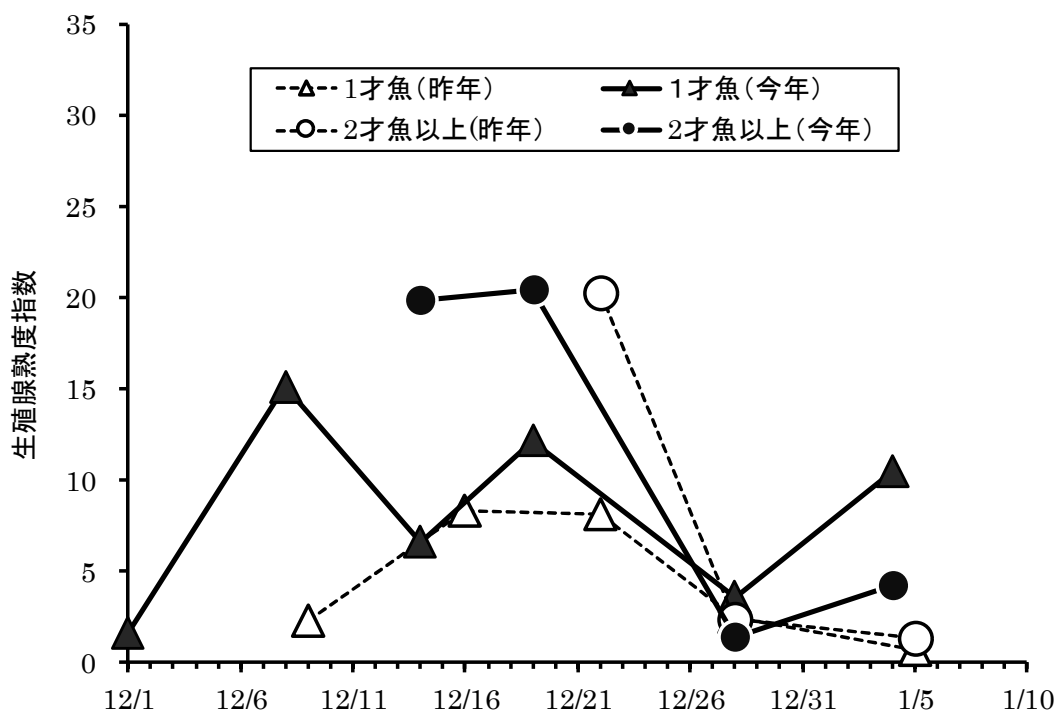


図2 雌親魚の生殖腺熟度指数の変化

2. 稚仔の調査結果

稚仔の調査は1月25日、26日、29日に実施し、表層から底層までの往復傾斜曳き（口径60cmのボンゴネット使用）により採集した。

1地点当たりの平均採集尾数は、播磨灘が0.3尾（昨年：1.7尾）、大阪湾が0.4尾（昨年：2.2尾）、紀伊水道が0.1尾（昨年：0.6尾）であった。各海域とも昨年及び平年を大きく下回り、2017年以降続く不漁年の中でも分布量は低水準であり、播磨灘と大阪湾では最低値であった（表3、図3）。

全長の平均値は、播磨灘が9.5mm（昨年10.1mm）、大阪湾が6.8mm（昨年8.6mm）、紀伊水道が13.5mm（昨年9.3mm）であった（図4～6）。

表3 海域ごとの稚仔採集尾数平均値（1m²水柱当たりの尾数）

	播磨灘	大阪湾	紀伊水道
今年	0.3	0.4	0.1
昨年	1.7	2.2	0.6
平年	9.6	14.2	2.9

（平年：ボンゴネットによる調査を開始した平成24～令和4年の11年間の平均値）

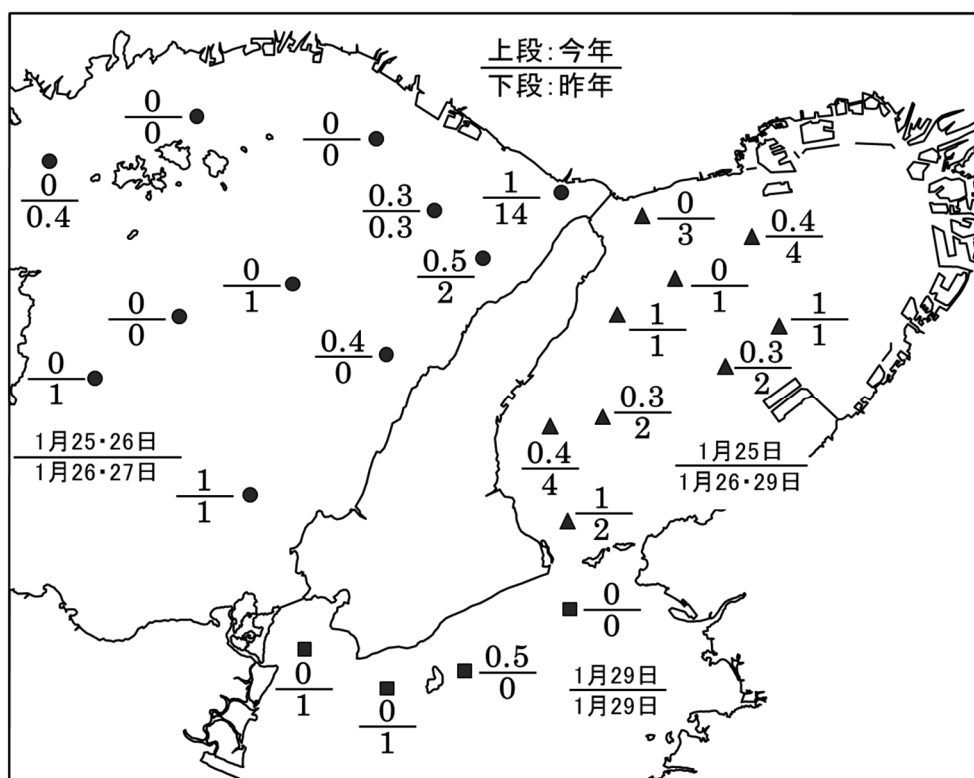


図3 稚仔の採集尾数（1m²水柱当たりの尾数）

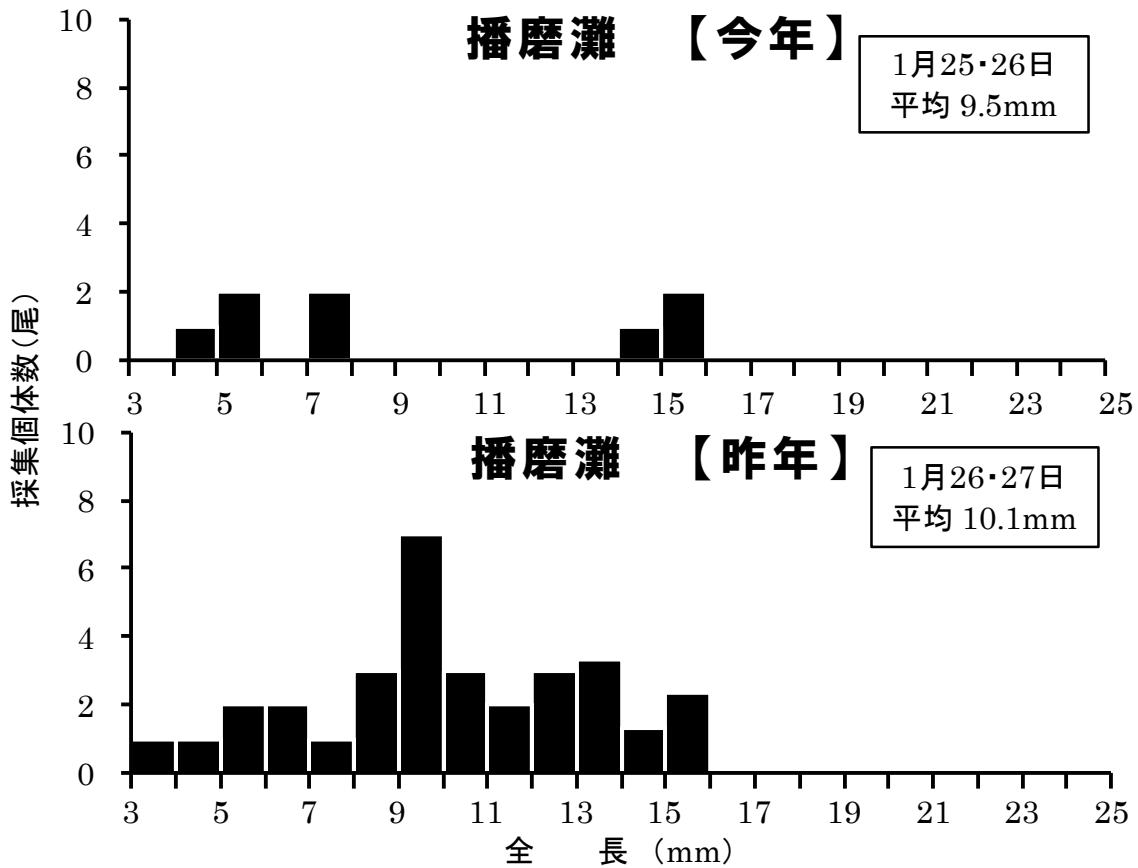


図4 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(播磨灘)

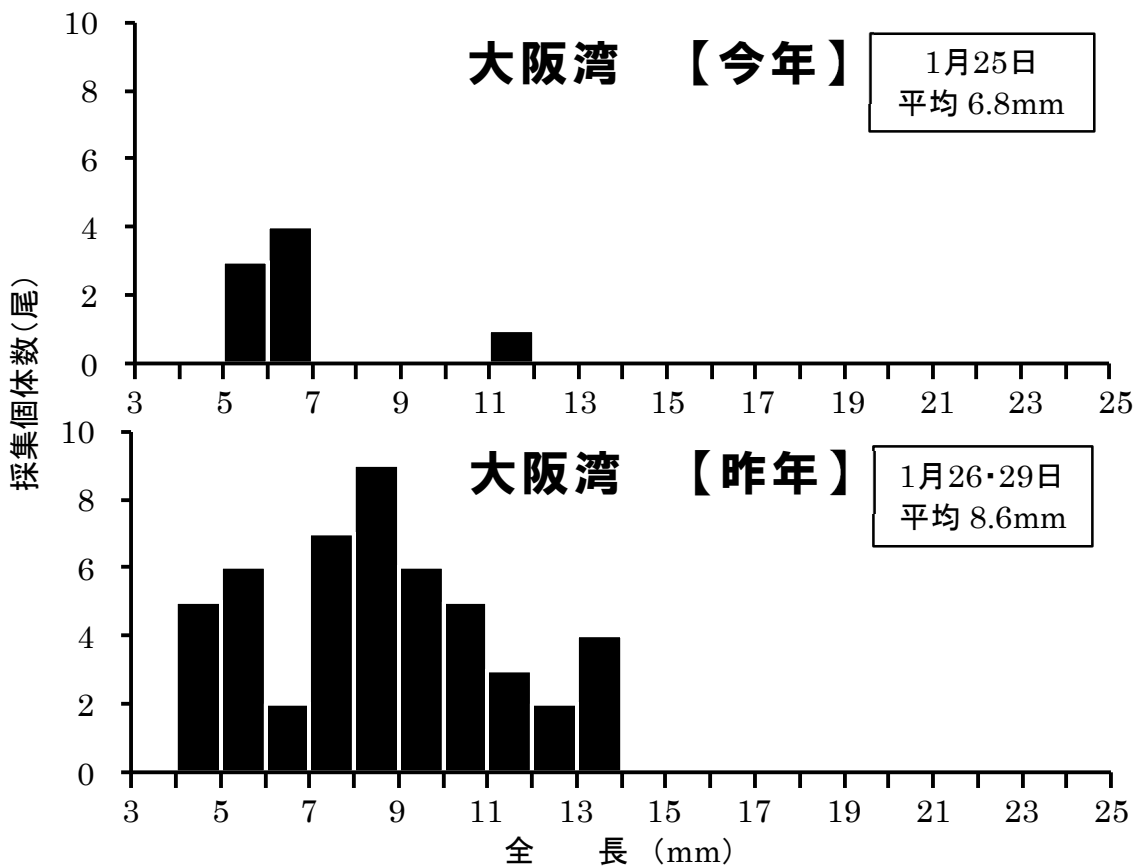


図5 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(大阪湾)

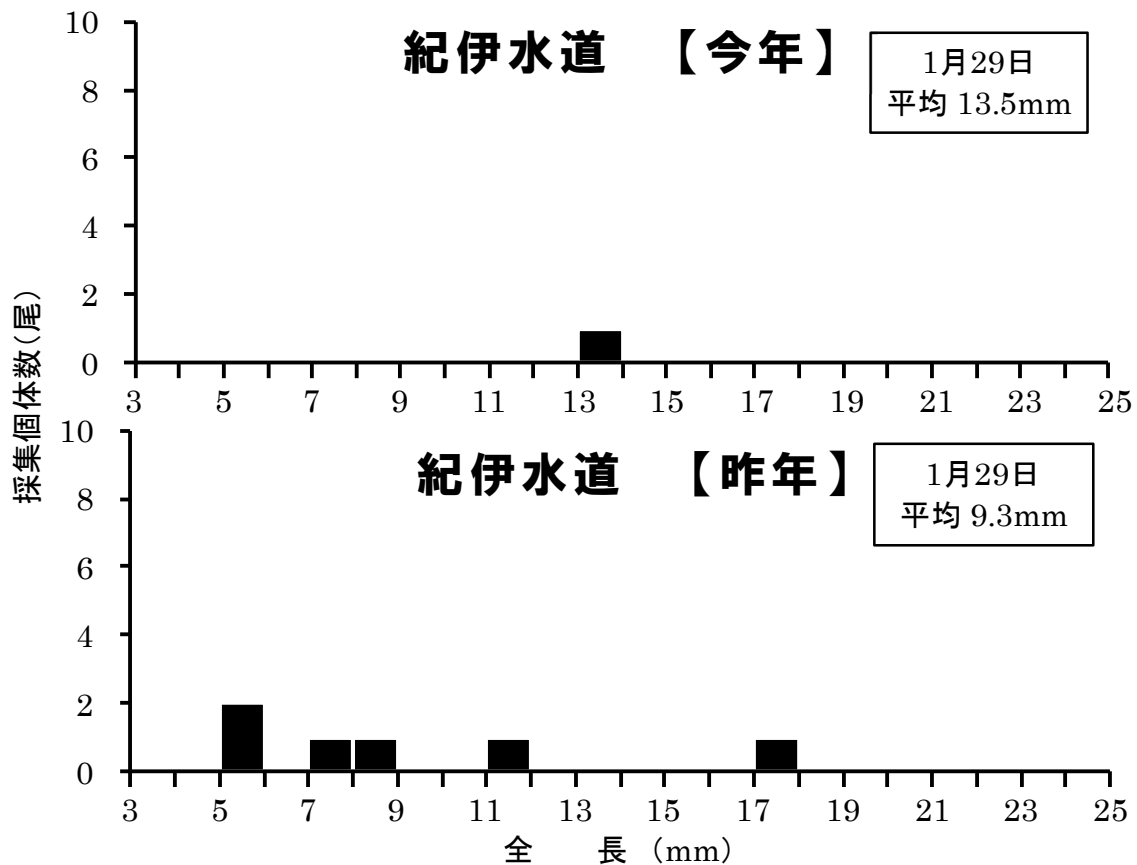


図6 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(紀伊水道)

3. 稚仔の成育の見通し

稚仔の成長速度は水温の影響を強く受け、水温が高いほど成長速度が速くなる。今年の明石海峡部の水温は、平年（平成25～令和4年の10年間の平均値）に比べ1月上旬～中旬は高め、下旬以降は平年並みに推移している（図7）。

2月1日に大阪管区気象台から発表された平均気温の1か月予報（1週目は高い、2週目は平年並み、3～4週目は平年並みか高い）から判断すると、今後の水温は平年並みか高めに推移すると予測され、稚魚の成長速度も平年並みか上回ると考えられる。

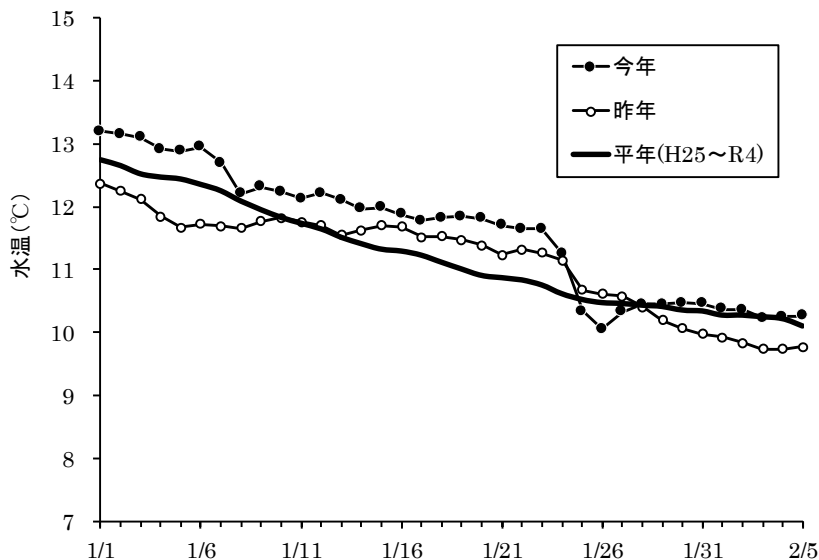


図7 明石海峡部1.5m層日平均水温の推移

4. シンコ漁の予測

昨漁期の漁獲量は、播磨灘、大阪湾、紀伊水道の3海域において平年(標本漁協における昭和62年～令和3年の2、3月のシンコ漁獲量の平均値を基本とする)を大きく下回り、紀伊水道では漁獲されなかったが、播磨灘、大阪湾では一昨年同様低水準であった。

今漁期の産卵量は、低水準であった昨年を大きく下回り、稚仔の分布量は3海域とも昨を下回った。これらのことから、今漁期のシンコ漁獲量は平年と比較すると依然として低水準であると考えられ、3海域とも平年を大きく下回り、特に今漁期は2017年漁期以降の不漁年の中でも最も厳しい漁模様が予想される。

※) シンコの網おろし日は各地区漁業者の自主的判断によるが、過去の経験から網下ろしが早過ぎた場合には不漁になる可能性が高い。網おろし日の決定にあたってはこの点を十分に考慮する必要がある。

なお、イカナゴの資源量は近年でも最低の水準であり、危機的な状況であることから、将来にわたって持続的な漁獲を目指していくためには、イカナゴ資源を最大限残すことを考慮した取組が必要である。